

# 副読本を作ることが副読本作りの目的ではない

前深圳日本人学校 教頭

茨城県稲敷郡河内町立金江津小学校 教頭 齋藤 寛

キーワード：在外管理職、学校経営、副読本作り

## 1. はじめに

### (1) シンセン日本人学校の現況等

本校は、現地日本商工会の尽力で2008年に創立した世界で2番目に新しい日本人学校である。当初36人だった在籍数は、現在280名近くになっており、減少傾向の中国地区で唯一増加している学校である。但し、学校施設は8階建てのオフィスビルを改築した狭く変則的な教室等で、体育館もなく十分な教育環境とは言えない。

しかしながら、その狭さを親近感に変えて、中学生と小学生の合同行事や掃除等を一緒にするフレンズ活動を実施し、小中一貫教育の推進に役立てている。在外ならではの外国語教育にも力を入れており、今年度からは小学校1年生から週2時間の英語と1時間の中国語を実施している。

### (2) シンセン日本人学校の特色

#### ①教科担任制

小中併設であることが本校の大きな特色の1つである。また国内でも小学校の教科担任制を積極的に推進する傾向は強く、児童の学力向上、教員の負担軽減、生徒指導上の配慮、保護者から見た担任の較差への軽減などよい点が多い。小中併設の日本人学校では、更に教科担任制が組みやすいという利点がある。本校では、理科、音楽、図工、体育、家庭、英語で教科担任制をとっている。

#### ②国際理解教育

深圳市は経済特区であり、その関係で南山区蛇口地域には本校も含め5校のインター校がある。また、今年4月から蛇口地区が自由貿易試験区にも指定され、さらにコスモポリタン都市として発展し続けている。そうした実情からこれまでは本校が主体となって現地公立学校や大学と交流し、国際理解教育を推進してきたが、昨年からは、地域の教育当局や他の国際学校と協同で取り組んでいる。

一つは南山教育局が国際交流協力事務局を設置し、地域の公立学校と国際学校との交流プラットフォームを築こうという施策である。子ども達だけでなく教員交流や文化交流も図られている。

もう1つは現地公立学校組織との国際理解教育の推進である。育才教育集团（幼小中高合わせて11校で1万人在籍）と5つの国際学校で「蛇口国際教育連盟」を創設した。



## 2. 実践内容

### (1) 副読本作りは副読本を作ることが目的ではない

ここに述べようとしていることは、いわゆる「副読本づくり」という実践ではない。在外の管理職として、学校の強みを生かして、どのように職員の組織を作り、副読本づくりという研修を通してチームとしてまとめたのかという実践である。以下は私がこの実践を通して職員に期待した点である。

- ① 全員で取り組むことによってチーム深圳としての喜びを味わってほしい
- ② 課題を持ち続け、一步前が出る教師になってほしい
- ③ 学校内外との連携を学んでほしい
- ④ 在外勤務の面白さを味わい、再度の派遣を目指してほしい
- ⑤ 中国にする関心が高まったり中国人の友人ができるかもしれない

以上のような目標を掲げて副読本作りを行ったのが、本実践の骨子である。以下に時系列に述べていく。

## (2) 組織を作って人を生かす

2015年の赴任早々、小坂誠二前校長（茨城県）から副読本作りは急務であることを告げられた。開校間もない頃に作った副読本は、優れた内容のもので携わった職員の力量の高さと開校の息吹を強く感じた。しかし学校の所在地が移転前だったことは、改訂版の必要性を強く感じさせた。幸いシンガポール日本人学校時代に副読本の副編集長だったので、副読本改訂の困難な点は重々理解しているつもりであった。ただ「海外に来ている教員は、やりたがるだろう」と漠然と考えていたことは間違いだった。私にとっての初年度は、久しぶりの中学校の教科指導や、PTA組織を整えること等新しい仕事を覚える事にかまけて十分に支援できなかったため、副読本改訂作業は全く進まなかった。大きな反省の残った1年目となった。

2年目には、学校長の掲げる年度目標の1つにも副読本改訂が大々的に掲げられた。私も自己目標の1つに「副読本の改訂」をあげた。ただし学校管理職らしく取り組んでいきたいと考えた。副読本作りを通してシンセン日本人学校の職員を一回り大きくしたいと考えた。そのため当初から以下の目標を作った。

- ・教頭が中心であってはいけない。責任者を選ぶこと。
- ・組織を作り、全職員の手で作り上げ、チームとしての学校を意識させること。
- ・学校外の力をできるだけ活用すること。
- ・楽しく、目立つように活動すること。

### ①中心になる人物を選ぶ 2015年4月（私にとっての2年目・最終年）

一人ではできないが、学校という組織は二人いれば殆どの事が可能になることを若い頃からの経験で知っている。まずはパートナーを探すことが重要な仕事であった。教員バランスが悪く文科省派遣の3年目がいなかったので、2年目か1年目になるが、先々を考え1年目の赴任したばかりの教師に目を向けた。履歴を調べたが、皆やれそうな者ばかりである。個別に話した時の反応などを色々考え、赴任教員の中で活躍の場を与えたら飛躍しそうだと感じた教員を中心人物にすることにした（結果的に選んだ人物は大正解であった）。

彼を副読本編集委員長にして組織を作った。

### ②「やれそうだ」の実感を生むような組織を作り、計画を作る

組織の編成には細心の注意を払い、困難さが予想される箇所は個別に助言したり励まし、全員が納得のいくように根回しをして、負担感の無いように配慮した。また先生方へお願いするときには、次の点を配慮した。

＜取材や資料まとめの時間を確保する＞

取材にいくときには、学校車を手配したりタクシーを手配し、勤務時間内で活動できるように配慮した。また職朝などで活動を称揚することは忘れてはならないことである。

＜具体的な例を示す＞ゴールの姿をビジュアルで示すことにした。

＜一緒に考える＞ 最後はこれに尽きると思う。

### ③職員室で大きさに楽しく活動する。

若い頃から「どんな校務分掌もキラリと輝くようにやる」と心がけてきた。焼却炉担当などの学校の片隅の振り返られないような地味な校務分掌でも、工夫でキラリとさせることができると思い実践してきた。

＜土曜日のシンセン市内散策（通称さいとう散歩）＞

教員のシンセン理解を進め、中国に暮らすことを楽しんでもらうために、土曜日に市内の散策を企画した。市場、公民館、博物館、何気ない裏通りの商店街、飲茶屋さん、若者が好きそうな街、薄汚れた街、等々を楽しみながら散策した。朝から始まって昼に本当に安い“そこいらの食堂”で、地元の人とお話ししながら食事

をして終了というのがパターンである。この企画によって赴任教員の中国理解は飛躍的に進んだ。また、副読本作りの楽しさを味わってもらえたと感じる。振り返るとこの企画の盛り上がりで副読本作りが円滑に進んだとも言える。

＜副読本編集委員会企画会＞

副読本作りのチーフ達と教頭とのミーティングは、大々的に行うことにした。週の計画に入れ、会議室の予約を取り、時間割を調整して空き時間を作って会議を行った。

#### ④学校内外の力を借りる

タイトルに示したように副読本作りは手段であって目的ではない。人を育て学校を育てるいわば修行の場である。副読本作りはこうした目的に為には正に恰好の場である。

先生方に「プロジェクトとはどういうものか」を理解してもらう事も研修の目的である。そのため前述までのような配慮の他に、以下の学校内外の力を結集することを示した。

＜他の日本人学校から教頭会のネットワークを活用して副読本を集める＞ ＜海外子女教育財団から助成金を頂く＞ ＜地元の社会との連携：会社、学校、博物館など公共施設、印刷屋さんとの交渉、近くの商店街の方との関わり、現地の日本の会社＞ ＜著作権関係の交渉＞ ＜写真好きな事務局長や美術の教員の協力で、装丁を整える＞…

こうして羅列してもたくさんあり、その一つひとつがそれぞれ意味の深い事であり、話し出せば思い出も多く、きりの無いことばかりである。こうした力を多面的に活用することを学んでもらえたと考える。

### 3. おわりに

副読本作りは副読本を作ることが目的ではないと考えてきた。教頭が常に意識しなければならないのは学校長の考えるランドデザインの達成なのである。学校長の書く職員向けのお便りの名は「チームシンセン」である。その1号1号を（一見楽しそうに）書く学校長の思いに寄り添う事を心がけてきたつもりである。

◇子ども達はもちろんのこと、若い教師もネットの情報を好む。一瞬にして誰かが作った情報が手軽に得られるからであろう。しかし街に出て、実際に見て、話したり体験したりしての情報はもっともっと奥深いものである。言うならば質の違う情報であり、そこには係わって知ることができたという喜びとともに愛情が生じてくるものである。私自身、カメラと辞書をポンコツの車に積んで、夜明け前からシンガポール中を走り回っていたことを1番の財産だと今も感じているからである。

◇日本人学校の職員は元々一人ひとり力があつて誠実で積極的で魅力的な教員ばかりである。この副読本作りを通して、先生方は教師として更に一回り大きく成長し、学校は一皮むけたような雰囲気になったと感じている。

◇この報告書をお読みになれる方は、国内での教育を熟知され、その上で在外での教育に強い関心をもたれている方だと考える。そこで、私は管理職としての派遣の楽しさや、意義深さが伝わるような実践報告にしたつもりである。拙稿を読んでいただいた方が、私のつたない実践に励まされ、「こんなに楽しそうなのか」と、海外派遣に更に希望を膨らませて頂けたら大変うれしい限りである。特に管理職での派遣を志す方々に勇気を持って頂けたら望外の喜びである。

◇おしまいに私のような出来損ないの教頭を我慢して使って下さり本当にあたたかく見守り続けて頂いた池田校長先生、こんな教頭に最後まで付き合ってくれた職員や関わって頂いた多くの方々、赴任前から支えて下さり、帰国を温かく迎えて下さった茨海研の皆様、そして何よりも優しく逞しい中国の人民の皆さんに感謝して筆を置

きたい。

<土曜日に行った朝市の帰り>

右から：副読本編集委員長 今田先生

その左：散歩の付き添い 甕先生

その左：たまたま同席の中国の男性

その左：その奥様

おかずを分け合ったり、ビールをつぎあったりする仲にすぐなる。

